

「祭り留学」で

都市と地域の関係
人口増加を実現株式会社オマツリジャパン
代表取締役 加藤 優子

オマツリジャパンについて

私たち「オマツリジャパン」は、「お祭りサポートの専門企業」として、創業以来、地域の皆さまの誇りである「祭り」や「地域文化」に丁寧に関わり添い、祭りと文化の継続・継承のために活動しています。

日本には約30万件の祭りがあると言われてます。祭りはかねて、地域の人々の生活の一部であり、誇りであり、心の拠り所でした。しかし高度成長とともに進展した都市部への人口集中、加えて近年の急激な少子高齢化による人手不足、資金難などを原因にかつてない危機的な状況にあります。

当社は、祭りと地域文化への深い理解と敬意を持ち、見落とされてきた祭りや地域の文

化的・経済的価値を掘り起こし、磨き上げ、地域の活性化も見据えた課題の解決を目指します。

年1度の祭りを、年間を通じた観光資源へ

地域のお祭りを持続可能なものにしていくため、当社では年に一度の祭りを、年間を通じて観光人口・交流人口の増加へと繋げる実績を積み上げてきました。当社の補助金申請、インバウンド対策、広告・マーケティング、イベントプランニングの専門家が、地域企業やDMOなどの皆さまとも連携し、伝統の保護・継承や集客、収益面での課題の解消のための事業を行っています。例えば

ば愛媛県では、2023年の「新居浜太鼓祭り」で、通常は地元縁のある人しか参加できない祭りに特別に「かき夫」として参加できる有料体験ツアーの企画・販売を実施しました。

このように、避けられない人



祭り留学サイトトップ画像



当社の事業はこちら

口減少によるさまざまな課題に対する緩和策として、都市部と地方の関係人口を増加させる取り組みがあります。オマツリジャパンは、この関係人口を増やすユニークな試みとして、2021年度にJ・R東日本スタートアップ株式会社様と共同で、秋田県男鹿市の「男鹿のナマハゲ」をテーマに「祭り」を起点として地域と人をつなぎ、地域のファン（関係人口）を生み出すプログラム「祭り留学」を実施しました。

「祭り留学」の内容とは？

「祭り留学」は、祭りや伝統行事当日に参加者を誘客するだけでなく、祭り開催以前のアクティビティを通じて祭りや地域に興味を持つ地域のファンを生み出し、新しい祭り参加や地域との関わり方を生み出すプログラムです。

全4回のプログラム（修了式を合わせて全5回）の内容は、

①「なまはげを知る オンラインツアー」

（2021年9月25日）

秋田県男鹿市真山地区にある、なまはげの伝統を伝える施設「なまはげ館」からオンラインセミナーを開催し、なまはげの知識を深める内容。オンラインで「戒め問答」も実施。

②「なまはげを学ぶ オンラインツアー」

（2021年10月23日）

男鹿市の真山神社からのオンライン中継で、五穀豊穡の神として知られるなまはげのご利益を通して、男鹿の人々となまはげの関わりをひも解く内容。男鹿の味覚を体

験できる商品のオンライン競りイベントも実施。

③「なまはげに触れる 現地体験ツアー」
(2021年12月4日)

第1回、2回で中継した施設を実際に訪問し、地域の方々との交流を深める内容。伝統料理の調理体験やなまはげの衣装にも使われる藁細工体験も実施。参加者実績は首都圏を中心に全国から10名。



現地ツアーの様子

④「なまはげ柴灯まつり直前オンラインツアー」(2022年1月14日)

「男鹿のナマハゲ」の伝統を未来に伝える取り組みをしている地域の方々3名と

のトークイベント。同年2月11～13日開催「なまはげ柴灯まつり」の際に行われる「留学修了式」の紹介。



オンラインツアーの様子

2022年2月12日に行われた修了式は、新型コロナウイルスの感染拡大の状況を鑑みてやむを得ず辞退される方もあり2名の参加となりました(当初5名が参加を予定)。修了生の方からは、「子供とコロナ禍の自宅で楽しむ為にオンラインで参加したことがきっかけでした。伝統文化に親しむ機会はあまりなかったですが、家族で男鹿のナマハゲのファンになりました。また家族で地域に訪れたいと思います」。

「祭り留学に参加したきっかけは、父が以前に男鹿へ訪問して、素晴らしい場所だったと話してくれたことがあったからです。オンラインで男鹿のナマハゲを知って、こうして男鹿まで来られたのはとてもいい機会になりました」といった感想が寄せられました。



なまはげ館

オンライン参加から現地訪問を促すプログラム

男鹿のナマハゲをテーマに一連のツアープログラムとして開催された「祭り留学」。この年間を通じた取り組みでは、オンラインでの参加から複数回の現地訪問へとつながる動機付けができるコンテンツとして効果を検証することができました。

オマツリジャパンでは、今後も「祭り」を起点として地域と人をつなぎ、地域のファン(関係人口)を生み出すこうしたプログラムを、さらに広い地域で展開できるスキームの構築を目指してまいります。